

□1月7日礼拝説教(隅野徹牧師短縮版)
「主の光の中を歩もう」(イザヤ書2:1～5)

イザヤがこの預言をかたった当時、アッシリア帝国が強力な軍事力によって当時のパレスチナ、アラブ世界の支配を確立しようとしていました。しかし、神はイザヤをとおして「ご自身こそが争いを裁かれ、武力によって世を支配しようとする者を戒められるのだ」ということを強く語られたのです。その神の御心を具体的に表す言葉として彼ら、つまり救い主を中心に集められた者たちは、剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とするのだという、ミカとイザヤが共に語った言葉があるのです。神が争いの根が断ち切られる、だから戦いのための武器は必要がなくなるのです。

当時のイスラエル、ユダが「軍事力をもった大国アッシリアの影響をもちにうけてしまって、軍事力をあげることで国を維持しようと考えてしまったように、現在の世界も軍事大国に対抗するためには、高性能の武器をもつことが何より大切なことだ」という考えが蔓延しています。そんなこの世にあって、軍事力に軍事力で対抗することの愚かさを、私たちも伝えていきましょう。人間全体が完全な意味で「もはや戦うことを学ばない」ことが実現するのは、この世では到底無理に感じてしまいがちです。しかし神の御心によって平和が実現する神の時、終わりの時は、今現在の「時」とつながっているのです。

5節で教えられる「光の中を歩む生き方」とは、世の多くの人がしているような、人を恐れ、人の力に頼る生き方の真反対だということが、今回の箇所から示されるのではないのでしょうか。人を傷つける道具ではなく、人の糧をつくるための道具を増やし、そのために労を惜しまない…それが神を愛し、隣人を愛する生き方であり、神が喜ばれる、光の中を歩む歩みなのです。私たちは、たとえ小さな一歩でも、神の御心をなす者として生きてまいりましょう。
(終)